

「ゲーテのファウスト」研究に就て

梶野 あきら

序 文

「ゲーテのファウスト」研究書は、十九世紀のものを除いても、手許に六十冊を超えるものがあり、未読のもの数冊以外を見渡しても、それぞれが色々な観点から論じて居て、凡そ統一見解といったものは観られない。全く異説紛々として止まる所を知らず、という実情である。しかも大概のものは、先輩たちからの引用を、或は論駁し、或は賛成し、それによって自己の主張を権威づけようとしている。時代と共に解釈が変り得るということは勿論否定しないが、特別のものを除いては、むしろその立脚点のずれが論争の底にあって、甚だしいものは原作者の言葉を無視し（それはゲーテ自身も「創作された作品が、作者作上に優れたものであり得る」ことを肯定していることから、ゲーテの日記や書簡、対話の記録などの文献に見られる言葉に頼って、作品を理解することだけが正しいとはいえないが）更には作品中の言葉まで曲解し、或は無視して——まさか読み落しているのではなからうが——自分の文芸観、人生観、世界観へ歪曲しようとするものが、決して少くない。自分の立場から気に入らなければ、貶価し罵倒までする——ウールファウスト以来ずーッとそれが続いている（H. Schwerte:

Faust und das Faustische 1962はその歴史を詳しく示している)。是らのことはゲーテ研究だけに限らないであらう。

(昨今の「誤解の権利」などという全く「学識のある愚物」が、評論界で原稿料稼ぎの爲なら何でもやるうという状態と照合して見ると、自己中心的、利己主義的曲解を「人権尊重」とこじつける時流の反映と見る他はない。)

本 論

作者の身になって再創作することが、作品理解の出発点であり、それが追体験としての鑑賞の意味である、と考えるならば、やはり作者の意図によって作品を解すべきであらう。それには、作品の中からこそ作者の意図を把握すべきである。作品外の文献資料がある時は参考にはなるであらうが、是が残っていない作品は理解できぬとはいえない筈である。作者不明、詠み人知らず、多くの民謡や民話などでは、作品そのものが語ってくれる。

是を読みとることが、作品を理解することの根底である。——(即ち作品外から推論的に限定的に把握るのは、屢々誤解に陥る危険を含む。時代社会が個人に強い影響を与え、社会人である個人はまた社会に影響を与える——この相互作用、相関関係を把握することは、むしろ前提条件的なもので、文学史研究の意味もここにあるというべきであらう)——この様に色々な見解、解釈、評価があるということは、正に「ファウストは測り知れぬもので、知性に近づけようとしても冗だ」「文芸は測り知れず、知性でつかめぬほど、一層良い」というゲーテの言葉から出てくることではなからうか——それだけに一層心惹かれる、というのが、実は私の結論でもある。

全く作品ファウストは屢々指摘されて来た如く「矛盾」に満ちている、また間隙も少くない(大きい飛躍は、第二部の第二幕の終と第三幕との間……即ちヘーレナの復活の場が欠けたこと、第四幕の高山の場の終など)、

しかも全体としては一つのまとまった作品をなしている。それだけに多くの問題を含んでいる。

理解しようと「努力する者は迷う」ようにできている、いや「この迷いの中で、正しい道を自覚」して行かなければならぬことを追体験せざるを得ないのである。

作品ファウストに関しては、ゲーテ自身の言葉がかなり沢山記録されて残っている。だから是を全く度外視する必要はないし、少なくとも作品の中から汲みとれる所と矛盾しない限り、むしろ裏づけとして、傍証として用いて差支えはなかるう。唯、作品外の記録から得る所を作品の中へ押しこむことは避けなければならない。特にモデルの問題、ゲーテと親交のあった人々が、作中の人物と類似する所があったり、或は序でながらのたとえ話に持ち出された記録があると、直ちに作中人物を實在した人物と結びつけたくなる——誤ったリアリズムの立場をとる人に起りがちのことである。事件に就ても同様である。素材としては、どんなに空想的な作品に於ても、現実から抱えられる。(お化け、怪物、魔物の……實在する動物や人間の混合体以上のものではない。神像も実に人間を模したもので、(是を宗教家は逆立ちさせて、「神は己に似せて人間を造り賜えり」というだけのことである。)そこに人間の創造的想像力の逞ましさを見るべきであろう。神も仏も鬼も魔も我々の肉眼で見えない。それを形象化するには、心の眼——想像力——で観る所を、肉眼で見えるように、即ち既に肉眼で見たものによって対象を構成する外はない。演劇の場合にも、人物、影、或は口上で、音で、感覚を通して、観る者の心象に訴えるのである。

この様な自明とも思われることをここに更めて述べるのは、作品ファウストが全くデーモン(ダイモニオン)で充滿して居り、従つて余りにも「現実」離れがしているにも拘らず、舞台での上演を見たことがない我々に、

いや観客でなく、却って読者であるだけに、魔もの、魔女、妖鬼どもまでが、実に生々として心眼の前に浮んで来る——現在の映画技術を以てすれば、或程度は具象的に表現できるであろうのに、特に第二部の映画化が観られないのは遺憾である——併し映画化されずとも）せめて先死したモーツアルトによって音曲化されていたなら（ゲーテのはかない希望であった）と歎かざるを得ないが——読者の心の耳には作曲されていない、伴奏されていない音楽が聞えて来る。邦訳では原作の韻文のもつ美しさは全く判らない（ここに邦訳の一つの限界がある）。たとえ不十分でも原文で読むものには、その韻律の含みが感得されるであろう。

註 ここまで来るには、筆者には始めて読んだ時から四十年かかった。ゲーテがこの作品にうちこんだ六十年にはまだ及ばないが。

さて一九五二年に「賭の問題」五四年に、「昇天」を採り上げ、その頃までの研究を一応まとめた（浪速大学紀要第一巻、第三巻）が、その後のドイツでのファウスト研究を読んで感じ、把んだ所を整理して見よう。但し今は H. Kindermann : *Das Goethebild des XXJh.*, 1952 にあげてないものの数冊に限ることにする。デーモン（魔性のもの）に関しては、ゲーテ年鑑第十巻に掲載される。本稿は是らの補足の意味もある。（是らを参照せられたい）

J. F. Strich (1882—1963) : *Goethes Faust*, 1964

これは従来の教授のファウスト研究を改新したものとして遺稿として出されたものであるが、その特異な所は、F（以下人物ファウストの略号）が全く賭に勝つつもりがなかった、という点にある。即ち「賭は屢々誤解

される。人間の高い努力の精神を理解できぬM（以下悪魔メフィストの略号）は『留まれ、実にすばらしい』とFがいう瞬間を、与えることは決してない、と確信しているのかどうか―Fは賭に勝てば、相変らぬ苦悩、永遠の不安に止まることになる。……Mはペシリストである。……Fはこの矛盾の精たるMをそのかして、すばらしい瞬間を与えさせようとする。Fは賭に敗けたいと思い、勝つことを恐れている。いつまでも満足しないことに不安を感じる。……たとい自己偽瞞であっても……この瞬間は、生命と魂の救済を犠牲にする値打ちがあると思われる』（*シ*）と考えた上で、やがて「永遠にF的な不安から免れる為に、……賭に敗れようと思っていた」のが、最後には、「文字通りの意味で是に成功した」（*シ*）。「Fはこの瞬間にも、永遠に未来に向って努力するFのままであった」（*シ*）を、即ち「この瞬間は硬直させ衰弱させる享樂の瞬間ではなく、創造的未来をつくる実りある愛の行為の瞬間である故に、Fは賭に全く敗れたのではない」（*シ*）という。

敗れることに成功したり、全く敗れたのでなかったり、混乱していると思われる所があるが、シュトリヒ自身がハ〇才近くなって、百才の老人Fの心境、即ち老ゲーテの心境に共感を感じた故に、いつまでも休止することのない無限の道よりも、休息（怠惰の床でなく）を求めて、むしろ賭に敗れる事を欲した、と理解しなかったのではなからうか。併し依然として「この賭は、天国の序曲の現わす主とMとの間の賭の対立物である……」（*シ*）と、主とMとの賭という事を固守している。Mの申出た賭に対して、全能の神がMと同格の位置に下がって賭をする筈はなく、事実、神は『Fのことをお前に委かす』と答えるだけで、決して賭け事はしていない。しかもシュトリヒはMも神もFの心の中にあると観、やがてゲーテ自身の心中の悲劇、魂の緊張・分裂をFとMとに於て表現していると観ている。

要するに（浪大紀要第一卷一三四頁に述べた如く）ここからは、F自身が自分と賭けていることになるであろう。亡き教授を責めても仕方がないが、研究家として偉大であっただけに、後輩への影響を考えて、惜愛をこめながら抗言するものである。（尚、ダンテの影響を認めながら、一九三八年の講演記録の如く、ファウストを神曲とは称んでいないのは、改新、の意味であろう。）

序でながら附言すると、書斎の場での賭の条件についてのFの言葉は直説法で「怠惰の床に横わる時、……うまく私を瞞すことができるなら……瞬間に向って待て……というなら」と語られている。（結論部は接統法第一式）。是が接統法第二式であつたなら、その様な可能性を否定する気持が出たでもあるうが、直説法や接統法第一式ではその可能性があるという気持ちであつたと考えられる、——そうであれば、シュトリヒのいう「賭に敗れるつもり」が現わされているといえるかも知れない。併しシュトリヒは是には触れていない。

二、G. Albrecht u. J. Mitzenwei の編輯によるドイツ文学解説の古典の部（1956）中の「ファウスト」の所、その特徴的な個所である——

先ず、「愚民ども」(V. 558)（に本当のことをいった為に十字架にかけられたり……）の意味を註釈して、「支配階級の代表者・擁護者」としている。是は従来殆んど見過ごされて来た点である。またホムンクルスを遣り出すワーグネルに就て、Wurzburg の自然哲学者 Johann Jakob Wagner が「有機化学は有機体を結晶から生み出し得る」と主張していたことをゲーテが思い浮かべたと指摘している。（従来はパラツェルスだけをあげていた）。

更にFを自殺から止めたものを、虚無主義に陥る絶対主義理念に対する生の勝利と解している。（汎神論的、或は無神論的、少くとも反カトリック的異教徒的なFが、天使たちの合唱を聞いて幼時を思い出し、毒杯を棄てるというのでは、矛盾を感じる所がある。）

第一部のグレーチェン悲劇に就ても、人間・男女の社会的平等に基づく自己中心的な衝動満足への努力が非人間的であり、（*Flitner: Goethe im Spätwerk*, 1957 も「安息なしの非人間」と称んでいる）それを遂行するものは社会の敵となるという認識、として捉えている——是の犠牲がグレーチェンを始めとする四人である、と。

やがて第二部でFの古代のアルカディアへの憧憬——幻想の背後に、封建的絶対主義の恣意が資本主義的産業化への出発と結合して広汎な大衆収奪、その貧困化を生み出し、俗物根性の是に対する無関心がある、という情けない社会的現実が近代芸術家を益々不安に陥入れた、という指摘がなされる。

終には「ファウスト」もギリシア文芸の外形、ヘーレナの衣装をまとうているが、本質上は当代の民族課題の認識から生れ、F（ゲーテ）はこの発展途上で、美と調和への愛が、世の中へはたらきかけ、現代の生活課題を芸術的に克服しようという要求と、心の中で闘う近代芸術家の典型を代表するもの、という結論に導いている。

従って「支配権を得るのだ、所有権を！」という所も見落さないで、「資本主義的企画のプログラムが是以上はつきりと示されたことはない」。やがてMの「戦争か平和か、どんな状態からでも自分の利益をひき出す努力が賢いのだ」という世界の経済的支配、独占資本のやり方、を喝破するに至り、かくして考ゲーテの鋭い眼は当時の社会発展の傾向を先見していたと見るのである。

(確かに第四幕は封建制度の崩壊期を美事に描き出している。ここでのFは、名譽でなく事業を志しているが、まだ個人主義を脱していない。従つて其の事業の内容は、この解説の如きものと解し得るであらう。だからこそ最期の自己克服、個人主義脱却の意義が、一層深められるといえるのではなからうか)「第四幕の終は一八一五年から一八三〇年(現代的には一九一八年)までドイツにとって典型的な、独裁制、教会、資本主義、の三位一体を具象化している」と指摘する。

以下もマルクス主義的見地からの鋭い指摘、解説である。

本書の引用文献がルカーチ、アブッシュを始めマルクシストたちのものであり、ゲーテのリアリズムが、当時の歴史的社会的現実を鋭く捉え、未来を展望し、批判的に、諷刺と皮肉とを含ませながら、戯曲に象徴化したと観ることは、精神的にも正当に評価せらるべきであらう。(單なる觀念を寓喩化したものでないことは、現象の底にある真実を捉えて形象化している為に、浅薄な者には、この真実が却って捉え難い点に、はっきり示されている。)

三 Roman Boos: Goethes Faust in der Dramatik des deutschen Schicksals, 1953

是は世界主義的であるが、先ずこの戯曲を人の心に訴えるものとして捉え、反ヒットラーを主張する所が、異色といえるであらう。というのも、ナチス時代に「暴力主義的なものが総べてF的と喧伝せられ、賞讃され、また弾劾された」(S.5)から、『ファウスト、悲劇』を単にレーゼドラマ、原動力施與者、いや石炭液化者(ノーベル賞をつけた Bergius が技術の虜になつて純科学を棄て、有用目的にのみ奉仕するに至つたことに關係づ

ける)として観るのはゲーテが生涯の心の鼓動を戯曲の言葉に形づくった所を把えないものであり、ファウスト文学者、F的行動者は夫々「ファウスト」の一部分を手にかけているだけである、(S.9)と指摘する。それは「ファウスト」は「Fの心の悲劇」(S.8)であることを忘れるからである、といたいようである。「世界の認識と世界の中での行動を心の鼓動の中にひき入れることが、Fの努力して苦勞する所である……」やがて「永遠に女性的なものの知的体験へ、永遠に男性的なものの誠実の力によって突き進んで、聖母崇拜の博士として最後の場面に登場する。」(S.11)

「留まれ、お前は実に美しい」という最高の瞬間への呼びかけも、全曲を単に概念的に捉え、或は道德主義的に教訓化しようとする者には、「留まれ、お前は実に有用だ」と誤解することになる。」(S.13)

「この戯曲に於ける異教徒の首領はFでなく、主たる神そのものである。主神は異教徒Fを、『我が僕』と称んでいる。」(S.15)が故に。

「福音書の『太初に言葉ありき、』を勝手に『業ありき、』と誤訳し、かくてグレーチエンの入った牢獄へ転り落ちる……正に始めに非業(犯罪)——Mの変身であるむく犬の唸り声を聞いて精霊の助けだと感ちがえてであるが——そしてFは『最期に業あり』となる。」(S.16f)

「現代の思弁的生活からすっかり離れ、活動的になり、実践的・現実政治的という標語が巷に溢れて、終には犯行が続発し、破局から破局へ突進している時代にとって、主神のいう如く『たとい暗い衝動に駆られても、正しい道を忘れぬ』かどうかはよく考えてみるべき問題であり、正に「ファウスト」はドイツの運命の戯曲化として、此の問題にこの上もなく赤裸に立ち向っている。」(S.16f)たとえば(第四幕の高山の場に出てくる)喧嘩男

は「これはドイツ的でない、これはヒットラー的、(ナチスの)大管区指導官的だ」と解釈する。(S.35)

そこでボースの結論とする所は、ノブリスを引用しながら「世界市民的な最強の個性がドイツの現在の奈落から上がる事ができれば、ドイツの運命を戯曲化したゲーテのファウストは其の目標を達する」(S.47)というのである。

以上のような「ファウスト」の解釈が、原典に即して妥当であるか——ここにゲーテの先見の明がある——ということは別として、現在ドイツ聯邦共和国にナチスが再興しているという状態に照らしては、「ファウスト」の現代的意義として首肯できるであろう。

(W. Emrich: Das Rätsel der Faust-II-Dichtung も反革命的立場からであるが、ゲーテの先見を指摘している——Geist und Widergeist (1965) S.233f)

最後にもう一度「賭」に就て考えておきたい。というのは以前に是を採り上げたが、上記の如く「主神とMとの間の賭」ということが怪しまれないままであるからである。ウィトコフスキーの誤解の及ぼした影響は大きかったと思う(前掲浪大紀要)。リッケルトも「神のみが悪魔を欺くことができる」とか、「Fが神に混乱して仕えていて……混乱から賭の敗北が生じ……Mは所謂神との『賭』に根本的に敗れた」と論じていた(前掲)。当時入手していなかったもの——

H. Heffele : Goethes Faust (1931-1946)

H. E. Lauer : Goethes Faust im Lichte der Gegenwart (1949) (これも世界主義的立場である)。

は何れも「主神との賭」を述べている。

是らよりも重視すべきは

Gedenkausgabe, hrsg. v. E. Beutler (Artemis-Verlag)

第五卷でのボイトラーの所説である。

「悪魔はその犠牲者を墮落させ得ることを賭ける。そこで神は悪魔に人間を委ねる……その保証は、よき人間の暗い衝動と神の名づける人間の秘密な内なる力であり、更に悪魔そのもの——永遠の不安として人間をその最後の最高の危険『無制約の安息』から守るもの、としての悪魔——である。賭はMにとってのみ賭である。神と同等に対立すると思ひ、その思ひ上がりで、この賭では、M自身、単に手段で、相棒でないことを聴こうとしなのが、Mの傲慢不遜である」(S. 716)と後に断り書き(?)をするが、その前(S. 713)では「神との賭が可能である限り、賭が結ばれる……天上の世界での賭に、地上での悪魔の契約が相応する」と述べている。

是では結局、神と悪魔との間の賭の成立を認めているのである。MはFを刺戟する役目を与えられる。神にとって賭の保証は、人間の無限の努力と其の刺戟役のM、と説明し、Mを神の賭の相手だと思ひ上がらせるのが、神の手であるというわけであるうが——神から賭を云い出してはいない！——此の点ではリッケルトのいう如く「神のみが悪魔を欺くことができる」のか、それとも悪魔の傲慢からか、を論じるには及ばぬことであろう。

要するに賭というのは双方が同格の位置に於てやるものであるとすれば、Mの傲慢は却って悪魔らしさであるといえようが、主なる神が其の僕たるMと同格に下がって賭をするというのはおかしいことである。事実神はMの賭の申出で「何を賭けますか」に対して（FとMとの賭の場合の様な手打ちはなされないで）神はMがFを地

上でのみ誘惑する事を容認するだけである。いやむしろFの道連れになって、刺戟をする役を与えるのであって、是は賭ではない！

しかも（F伝説などと異り）Mは神に対しては「死んだ奴なんか相手にするのは嫌だ」（V:318）「屍体はごめんだ」（V:321）といって、死後の靈魂のことは口にしない。それが、Fの死んだ時、Fの靈魂を取り上げようとする——是は「天国でお遇いしたら、私に奉仕して貰いましょう」というFとの契約から来ているのであろうが——更に埋葬の所では、「よく硬直した体に色眼をつかつて見て来た」（V:323）と独り言をする。是は前言に矛盾するが、（この矛盾は従来指摘されたことはないようであるが）是がMの本心曝露だとすれば、序曲で神に対してすら嘘をついていた、というMの悪魔らしきということであろう。或はむしろこの様な前後の矛盾は、FがMを「矛盾の精」と称んだ（V:4030）如く、Mの本性であり、魔、悪魔である所以であらう。

他の研究者にも色々な問題を含んでいる。そこで一つ記しておきたい事は、

偉い学者のいう事だからといってそのまま信用してはいけない。常に批判的態度を失わず、それらをも「刺戟剤」として活用すべきである

という事である。Grau ist alle Theorie! ではなく、理論を、花咲き実あるものとする、ことを目指して、努力を続けよう！